
2018年度募集 2019年度実施
重い病気を抱える子どもの学び支援活動助成

報告書

活動期間：2019年4月1日～2020年3月31日

2018年度募集 2019年度実施 重い病気を抱える子どもの学び支援活動助成

重い病気により長期入院や長期療養をしており、学びへの意欲向上や学習の支援などがより必要な子どもたちに対して、学習機会の提供や学習環境づくりなどの活動を行う団体に対して助成を行います。

- ・募集期間：2018年7月20日～2018年9月15日
- ・助成対象期間：2019年4月1日～2020年3月31日
- ・助成金総額：1,000万円以内
- ・応募数：26件
- ・採択事業数：7件
- ・助成金額合計：8,402,753円

助成先団体および対象となる事業 (50音順)

ページ数	団体名	申請事業名	助成金額 (円)
P1	一般社団法人 大阪科学技術センター	院内学級への出前理科実験教室の充実	1,007,590
P2	特定非営利活動法人 かごしまコネクションズ	退院後の児童・生徒を対象とした学習支援事業	543,763
P3	公益社団法人 こどものホスピスプロジェクト	『WOW！働く体験』 病気の子どもの可能性を拓く、職業体験事業の推進	1,150,000
P4	特定非営利活動法人 チャイルド・ケモ・ハウス	小児がんや難病の子どもと社会をつなぐ 『かえっこバザール』の開催	1,725,000
P5	認定特定非営利活動法人 ポケットサポート	病気を抱える子どものICTを活用した学ぶ意欲支援事業	650,000
P6	特定非営利活動法人 み・らいず	医療的ケア児の情報発信、支援者育成 保護者向け相談会、医療的ケア児ときょうだい家族対象イベント	1,668,000
P7	認定特定非営利活動法人 ラ・ファミリエ	入院中の学習支援及び復学支援のための 対面ないし遠隔地に対応可能な支援者育成事業	1,658,400

計 8,402,753 円

※感染症拡大の影響などの環境変化により一部未実施がありました。

院内学級への出前理科実験教室の充実

事業の目的

現在、院内学級におけるICT環境は、病院との調整の中で医療機器等への影響等の問題から整備が難航しており、ICTを活用した授業が実施できない場合がある。また、ICTを活用できたとしても「見る」だけの授業となりがちで、子どもに実験等の体験をさせるためには講師側の工夫や、子どもの補助員が多数必要なことが課題となっている。今回、ICT教育を導入している京都市立桃陽総合支援学校の協力を得て、ベッドサイドの子ども達にも体験してもらえICTを活用した理科実験プログラムを開発し、他の院内学級等へ広く普及していくことを目的とした。

事業内容と活動経過

1. ヒアリング調査実施

実施予定校に対して実施してもらいたい内容、また、配慮すべき点等について2回ヒアリングを行った。また、実施終了後には学校担当者等に改善点等の調査を行い、事業内容の改善に努めた。

2. 実験内容の組み立て・実施

大阪教育大学の先生と打合せを行い、学校担当者とのヒアリングで得た情報をもとに、ICTを活用したシステムにて有効な機能等について検討を行った。また、システム構築にあたっての情報収集を行うとともに、実験内容やキットについて検討し、作成した。1月14日、15日、27日の3日間にて、京都大学医学部附属病院、京都市立病院、京都府立医科大学附属病院に入院している児童・生徒を対象に出前理科実験教室を行った。また、学校教職員に対してシステムの操作説明等も行った。

3. 出前理科実験教室の事例集作成

今回使用した機材や資料、評価や課題等を記載した事例集を50冊作成し、希望校等に配布した。

事業の成果

1. 講義内容について

・「見る」をテーマにすることにより、体への負荷が少なく体験をさせることができた。

・スプーンや鏡など、病室内でも使用できるコンパクトな実験体験キットの開発ができた。
 ・「見る」ことで完結する実験は、病室の子どもも、教室にいた子どもと同時に同じような感覚で講義・実験を楽しめる一体感ある内容の展開ができた。

2. システムについて

・参加者の理解度を表現する「え?」「うん」ボタンや、クイズ等の回答集計システムは、参加性を持たせるシステムとして有効。
 ・病室からの参加者は検査等で席を外れることもあり、動画記録している本システムは、振り返りにも活用できる点は有効。

3. 機器類について

・今回の実施でWi-Fi端末機器の使用について病院側の了承を得られた実績により、他の病院でのシステム活用の広がりが期待できる。
 ・テレビ会議用のカメラを活用することで、手元実験・講義の場面によってのカメラ操作がしやすく、少人数での実施が可能となった。

課題および展望

1. 講義内容について

・他のテーマでも同時に教室内外の子ども達が一体感ある体験ができる実験が開発できるか。
 ・病室内で使用できるように、衛生的で、簡易な操作性でコンパクトな実験体験キットの開発ができるか。

2. システムについて

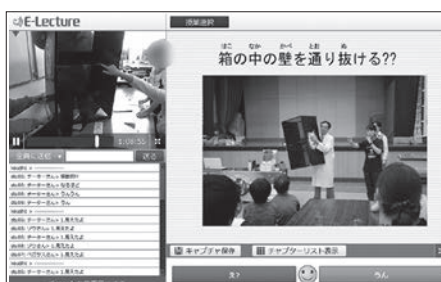
・使い方については講師・子ども共にシステム・機器への慣れが必要であり、子ども達に如何に慣れてもらえるようにするか。
 ・子どもの画面表示が2名までと制限されており、病室の子ども全員の様子が見えないところ。

3. 機器類について

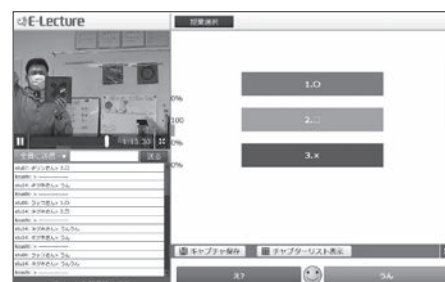
・集音マイクを活用することで、院内教室の子どもたちの声を効率的に拾えたが、講師の音が聴きとりにくく、マイク設備が課題。



三原色の光源で照らしたときに見える影を教室の内外の子ども達に見てもらっている様子



トンネルの中に壁があることを教室の内外の子ども達に確認している様子



病室の子どもにもマークを選択してもらっている様子

退院後の児童・生徒を対象とした学習支援事業

◎ 事業の目的

病気を患う子どもは肉体的な負担は勿論であるが、治療中やその予後も心的なストレスにさらされている。就学児以降の子どもは他者との比較から自己決定を行うことがあるが、学習の遅れや学習の抜けは自己肯定感の喪失につながっていると考える。

本事業は復学後の児童生徒に対して学習支援を行うことで、治療中や退院後も、学習の機会を確保することにより、児童生徒の学習や日常生活への意欲を向上させ、病気を経験する以前と変わらず、将来への希望や学習に前向きに取り組む社会の実現を目的とするものである。

◎ 事業内容と活動経過

① 学習支援員養成講座

第1回 8月10日 18:00～20:30

場所 かごしま市民福祉プラザ4階

講師 NPO法人がんサポートかごしま理事長 三好綾

「患児とのコミュニケーション」

参加者数 4名

第2回 2月9日 13:00～16:15

場所 かごしま市民福祉プラザ4階

講師 NPO法人かごしまコネクションズ理事長 井上大地

英語塾講師（氏名非公開希望）

「当法人と学習支援指導員について」「学習指導法」

「自己肯定感と自己効力感／ワーキングメモリーと集中力」

参加者数 7名

※ 第3回以降 新型コロナウイルスのため、講座実施を延期

学習支援員勉強会 5月～3月まで 月1回開催

場所 NPO法人かごしまコネクションズ事務局

内容 支援方法や支援中の難しさについて

② 訪問型学習支援

期間 平成31年4月1日～令和2年3月31日まで

契約者数 3名／のべ利用者数 142名／対応指導員数 3名

③ 教室型学習支援

場所 放課後デイサービスふきのとう

時間 10:00～19:00

のべ利用者数 23名／対応指導員数 2名

◎ 事業の成果

[学習支援員養成講座]

鹿児島市内の各大学及び専門学校にピラ（ポスター）を配布し、広く募集を行えたことで新しい支援員候補を獲得することができた。参加者からは「学習支援の必要性を感じた」「更に学びたいと思った」との声もあり、事業全体における養成講座の重要性を再確認することができた。

[訪問型学習支援]

市役所や特別支援学校に対して、案内を送ったことで、鹿児島市自立支援課とのやり取りや、学校訪問支援員からの相談と、今まで以上に行政などとの関係性を構築することができた。また、学習に対する不安や進路の不安などを支援後の保護者との会話から保護者支援の側面も持つことができた。

[教室型学習支援]

家庭では受けることができない統一模試の受講や、家庭以外の学習の場を提供することで、学習に対する意欲を向上させることができた。また保護者不在の休日においても、学習支援を実施することができ、対象児とその家族に寄り添った支援を行うことができた。

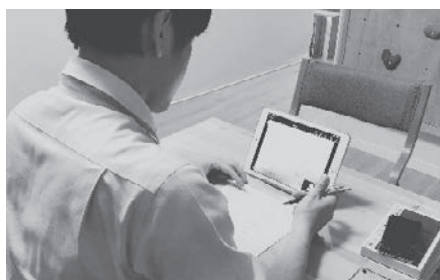
◎ 課題および展望

1 人員不足による初動の遅さや、広報活動の不備に関連したレスポンスの弱さが、事業全体の計画をくわすことになった。これは組織の問題もあり、今後は人員・財源の確保などの組織強化を行っていきたい。

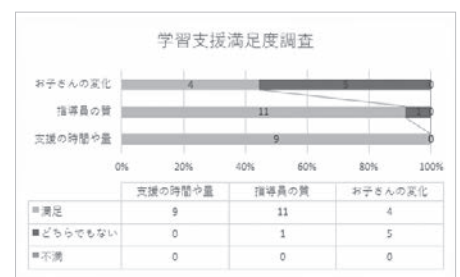
2 感染症対策としてインターネットを活用した遠隔支援を行ったが、経験不足や環境（機材や場所）不備のため、円滑な支援に至らないことが多くあった。そのため今後は遠隔支援の充足を目標に環境整備や情報収集などを行いたいと思う。



患児とのかかわり方や実際の指導法を学んだ



新型コロナウイルスの影響で2月よりZOOMを使い支援を行った



支援の満足度調査を行った。今年度は満足いただける支援を提供できた

『WOW！働く体験』

病気の子どもの可能性を拓く、職業体験事業の推進

◎ 事業の目的

苦痛の大きな病気治療を長期間必要とする、小児がんなどの病気の子どもは、たとえ治療が終了しても、再発の不安を抱えながら、もしくは再発により治療や入退院を繰り返しながら成長していく。この病気と共に生きていくなかで、病状とは異なる課題が大きくなる。それは、社会生活をおくるうえで重要な人間関係を築き、自分の力を信じ生きていく力の「脆弱さ」である。小児がんに限らず、長期にわたる入院治療や生活における制限が厳しい子どもの場合、自分の力で環境を変える（乗り越える）方法や経験を積む機会はほとんどない。LTC（命を脅かされる状態）の子どもが、孤立せず生きていくための学びの機会づくりを本事業の目的とする。

◎ 事業内容と活動経過

【事業内容】

体験としての学び。「誰かの為に」という機会づくりを、地域との交流の中で実践する。キッチンカーとの協働により、子どもたちが「働く」ことを直に学べる、実践する機会をつくる。その中で子どもたちの成長と学びを、自身でも気づくことができ、社会生活に対する自信を得られるようになることを目指す。

【活動経過】

本事業の目的を本人家族に説明し、子どもたちの自主的な参加を基本とした。その中で本事業への参加を希望した4名のホスピスメンバーを対象に、全4回の実践体験と2回の準備及びミーティングを行った。実践体験のなかでは、子どもたちが一つの仕事（キッチンカーでのピザ販売）から、単なる販売だけでなく、見えない役割や意義を知り、自分にできることを見つけていくことから始まった。仕事としての役割、協力しあって一つの目標を達成していくプロセスを、体験を通して学んでいった。自分の得手不得手に気づきながら、自分で考えていく機会を提供し、キッチンカー店主と1回ごとの振り返りと次回の準備を進めて行った。最終的には、子どもたち自身が「どうしたらお客さんにピザを買ってもらえるか」を話し合い、それぞれの役割を決めて動けるようになった。

◎ 事業の成果

子どもたち自身が「最初は恥ずかしかったけど接客ができた」というような、自信を獲得することができた。当初計画していた、「他者の喜びを自分の喜びに替える体験」というよりも、「自分自身の課題に気づき乗り越える経験」を積むことができたことは、本事業の大きな成果だったと考える。「働く」というリアルな現場が、子どもひとり一人の積極性を引き出し、自らの力で「楽しみ」を創り出す効果があった。地域社会にとっての成果は、ホスピスの活動を知り、共感に繋がり、自ら参加（お客として）できる場となったことである。

◎ 課題および展望

子どもたちの意見が活発になり、活動として盛り上がってきたところでの事業終了となり、頻度として十分でなかったことは課題として残る。ただ、大目標としていた「生きていく力を学ぶ」ための一歩は、本事業を通し踏み出せたと実感している。継続した場の中で、子どもたち同士の仲間意識や協力し合える関係づくりにもつながった。このような事業は頻度と継続度が重要であり、このような機会を発展させるための固定した役割も重要だと感じた。今後もさらに、子どもたちの「生きていくための学びの場づくり」は重要であると考えられる。大学生ボランティアなどの協力を得ながら、子どもたち自身が計画し実践できるような機会づくり、場づくりをホスピスの活動の一部として、継続していきたいと考えている。重い病気を経験していても、その経験をポジティブに捉え、その子らしく生きていくためのプラスの経験へと変えられれば、それこそが「生きていく力」となると考える。



ピザの温め方、おしぼりの準備も大事なお仕事



接客は、子どもにとってとっても恥ずかしくて緊張する体験だが、一歩勇気がでた瞬間



どうしたらピザが売れるか、真剣に考えて自分たちで動き方を決めてお店に立った

小児がんや難病の子どもと社会をつなぐ 『かえっこバザール』の開催

◎ 事業の目的

重い病気を持つ子どもたちにとって社会とのつながりが必要であるにもかかわらず、その機会はほとんどない。これまでの当団体の支援、ボランティアとの関わりを突破口に本事業では「おもちゃの交換会」という楽しいイベントを通して重い病気の子もたちと社会とのつながりを重点的に支援したいと考え「チャイケモのかえっこバザール」を実施した。

◎ 事業内容と活動経過

本事業は、

- ①インターネットなどを通じて、入院中や在宅療養中の子どもたちやきょうだい児を含む家族の『かえっこバザール』への参加を支援
 - ②重い病気を抱える子どもと家族についての正しい知識を広めるためのかえっこバザールでのワークショップの開催
- というふたつのテーマで実施した。

事業①ではイベント当日までに、患児やきょうだい児が治療や生活の中でがんばったことを「がんばったポイント」として集め、イベントでおもちゃと交換できるポイントにできるという取り組みを行った。当日は、会場でiPadを持ったボランティアと患児やきょうだい児をオンラインでつなぎ、来場が難しい子どもたちにもワークショップ体験や、自分の集めたポイントをおもちゃと交換できるようにした。当日、来場イベントに参加したお子さん（きょうだい児含む）は5家族12名、オンラインでの参加は2家族3名、患児の体調不良やその他都合などで当日のイベントに不参加のお子さんは7家族11名であった。

事業②では、「おもちゃの消毒コーナー」や「お薬づくり」を通じて感染予防や病気のお子さんについて、一般のお子さんに学んでもらったり身近に感じてもらうワークショップを実施した。また病気の子もと家族を支援する団体がブースを出し、活動紹介を行った。さらに、病気のお子さん自身がプラモデルづくりのワークショップを実施し非常に好評であった。

①と②ともに、事前準備から病気のお子さんやご家族との連絡調整、支援団体との打ち合わせ、地域住民への告知など当日に向け

での準備を綿密に行うことに注力した。

◎ 事業の成果

病気のお子さんやきょうだい児にとって、今回の取り組みはいつも治療や日常生活で我慢していることで「ポイント」をもらい、それを地域のイベントで活用できるという達成感のある内容になったと感じている。また当日のイベントに参加できなかったお子さんにとっても、普段我慢するだけの治療や、自分ががんばって取り組んでいることが目に見える形で評価されることにつながり自信が持てたのではないかと考えている。

当日の一般の方の参加者は約200名となり、病気の子もや家族について理解を深める大きなきっかけとなった。またボランティアとして開催地域の中学生が非常に熱心に活動してくれた。感染予防の観点から、通常病気のお子さんの支援に携わるボランティアについては当団体でも高校卒業以上と年齢制限を設けているが、今回のようなイベントでは、中学生もいきいきと活動できることがわかった。

当日運営側人数も約60名になり、重い病気の子もと家族のために地域の人達と関係機関が気持ちをひとつにできる機会であったと感じる。

◎ 課題および展望

中長期的ビジョンとして小児慢性特定疾病児童等の自立支援事業の一環として実施していきたいと考えているが、自立支援事業は直接支援のみが前提で啓発活動は対象外であるため、すぐに実現することは難しい。今後も行政に対して、重い病気の子もたちが自立するために、地域社会の理解と当事者と社会の接点の機会を作ることの必要性を訴えていきたいと考えている。

また、本事業を当法人のみが中心となって行っていくには、開催回数や広がりなどの限界がある。地域や大学でのボランティア活動としてこのかえっこバザールを実施し、当団体は側面支援として今後事業を実施していくと全国的な広がりを持つのではと考えている。



会場には、近隣家族や偶然通りがかった地域の人も参加



病気の子もたちを応援するレモネードスタンドを体験



子どもたちは手に汗握って参加してくれた

病気を抱える子どものICTを活用した学ぶ意欲支援事業

事業の目的

岡山県内で病気やケガを理由に長期欠席している子どもたちは平成27年度の学校基本調査によると小学生から高校生まで約1,100人に上る。

当団体は、活動拠点である事務所の他、2か所の小児病棟での支援の実施、県教育委員会、市の保健所からの委託事業や、県民局保健所との協働事業の連携により、県内各地に居住する病気を抱える子どもたちやその家族との繋がりがあがる。

子どもたちが病室や自宅で学習を継続するモチベーションの維持はとて困難であり、学校の勉強や受験勉強、治療や自立へ前向きに取り組むための「学ぶ意欲」を引き出す取り組みを目的として、各所の連携を地域支援コーディネーターが中心となり、当団体の学習支援スタッフと共に子どもたちへの支援を行った。

事業内容と活動経過

Aさん(当時中学3年生)、Bさん(当時中学3年生)、Cさん(当時支援学校高等部3年生)への連携と支援について説明する。

Aさんは長期入院を経てからの復学時に体調や気持ちの面でとても不安を抱えており、医療機関の外來受診時に当団体の学習支援や復学支援を利用した。医療スタッフと情報を共有し、事務所での支援時には看護師のスタッフも常駐し体調の管理を行った。3年生への進級当初は高校進学への意欲を失っており、学校とのコミュニケーション不足もあり一時不登校傾向も見られた。そこで、医療スタッフならびに当団体の学習支援スタッフの協力により定期的な学習支援や声掛けを行い、受験前には意欲的に学習に取り組めるようになった。

Bさんは5年前から当団体への関わりがあり、学校での友人だけでなく、当事者同士の関わりを求めて学習支援を利用している。夏頃から相談を受け、どの高校が登校可能かや、面接での病気の説明等を通して、受験に向けての意欲の向上の支援を行った。

Cさんが通う支援学校は県下で病弱部を開設しており、高等部での生活および学習支援、Cさん本人の適性等を高等部の教諭と連携しながら話し合いを行った。肢体不自由もあり、どのように生活管理を行っていくかや、卒業後は就職を希望していたことからパソコンの技術的な指導や入力作業の練習を行い、意欲の向上にも努めた。その他、多機関と連携し、地域支援コーディネーターが中心となり岡山県教育庁特別支援教育課と共に病室と学校をつなぐ遠隔授業の補助を行った。

事業の成果

事例の3名とも希望していた先へ進学や就職を行うことができた。学ぶ意欲支援事業の中で、細かな相談やヒアリングを重ね、その子に合わせた形での支援を充実させた。学習支援だけでなく、復学や自立を見据えた形で、彼らの学ぶ意欲はもちろん進学や就職を通して目指したい自己実現の在り方も話し合うことができた。高校進学をあきらめていたAさんからは「ポケットサポートの人たちみたいに人の役に立つ仕事、病気の人に関わることがしたい」との発言もみられるようになった。

岡山県教育庁特別支援教育課との連携については、専門家チームへの委嘱にはじまり、2020年度から「長期療養児支援充実事業」へ発展、地域支援コーディネーターを含むスタッフが関わることで、より一層、病気を抱える子どもたちへ地域での教育支援の充実が図られることとなった。

課題および展望

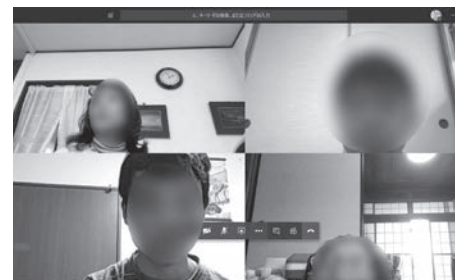
退院後の子どもたちへの支援に比べ、入院中の子どもたちへの支援が不十分と感じるところがある。病院内では刻々と変わる病状の変化などの課題から、定期的な支援が届きづらいという現実がある。今後は医療機関へ積極的に働きかけ、感染症のリスクのないオンラインでの支援やピアサポート相談、広報チラシの設置や配布によって、退院後の支援にも繋がられるようにしていきたい。



支援拠点(事務所)や自宅で定期試験や受験等の学習空白を補う



カードゲームなど同世代との交流の中で自己肯定感や自尊心を高める



個別学習支援だけでなく1対多での交流にも活用できるテレビ会議

医療的ケア児の情報発信、支援者育成 保護者向け相談会、医療的ケア児ときょうだい家族対象イベント

◎ 事業の目的

医療的ケアが必要な子どもたちは、教育や福祉サービスなどの支援の狭間に落ちてしまうことが多い。保護者にとっては、身近に同じような悩みを持つ相談相手がおらず、手探りで子育てをする状態に陥ってしまう。また、このような医療的ケアが必要な子どもたちとその保護者が抱える課題が世間に知られておらず、看護師や福祉職などの支援者が集まりにくい現状もある。

<目的>

- ① 医療的ケアが必要な子どもが普段できない経験や他者との関わり、保護者同士が情報交換できる機会をつくる
- ② 職員のスキルアップや職種の垣根を越えて支援者が集まり繋がる研修の実施
- ③ ホームページやSNSの開設を行い情報を発信し保護者と繋がり続ける

◎ 事業内容と活動経過

1. ホームページとSNSを活用した医療的ケア児についての情報発信

- ① 医療的ケア児支援サイトの開設 <https://mc.me-rise.com/>
- ② LINE@の開設

2. 保護者向け相談会、医療的ケア児ときょうだい家族対象イベント

① 保護者向け相談会

日程	2019年7月9日(火)	2019年10月18日(金)
場所	sodachi	み・らいず事務所
参加者	0名	1名(保護者のみ)

② 医療的ケア児とそのきょうだい家族対象イベント

タイトル	(1) みんなで遊ぼう！ ～音楽療法～	(2) みんなで遊ぼう！ ～秋まつり～
日程	2019年6月22日(土)	2019年9月1日(日)
講師	武藤紗貴子氏	
場所	み・らいず事務所	TSURUMIこどもホスピス
参加者	3組 (保護者、きょうだい含め8名)	4組 (保護者、きょうだい含め13名)

3. 支援者育成

① 支援者研修会

日程：2019年9月15日(日)
場所：関西大学梅田キャンパス KANDAI Me RISE
講師：株式会社スペースなる 代表取締役 梶原厚子氏
参加者：約70名

② SV研修

日程：2019年4月26日(金)
講師：社会福祉法人むそう 理事長 戸枝氏
参加者：8名

③ 現場研修

日程：2019年8月19日(月)～20日(火)
場所：社会福祉法人むそう ぼわわ名古屋ヶ丘
参加者：1名

◎ 事業の成果

① 福祉サービスに繋がる

ホームページでの情報発信やイベントへの参加をしてもらえることで、相談支援に繋がるケースがあった。また、いつかイベントに参加をしたいという方もおられ、潜在的に繋がる可能性があるケースがあった。

② スタッフの支援スキルの向上

先駆的に医療的ケア児の支援をしている団体へ現場研修に行くことで、スタッフ自身の知見も広がり、医療的ケア児への支援に自信を持つきっかけになった。

③ 既存施設の利用による参加者の増加

TSURUMIこどもホスピスの場所を借りることで、子どもや保護者がイベントに参加しやすい環境を作ることができ、参加者も多かった。

◎ 課題および展望

① 継続的なイベントの実施と情報の発信

医療的ケア児のきょうだいの参加もでき、保護者も繋がるイベントを継続的に実施していくために、情報発信と資金の調達を行っていく。

② 福祉サービスと繋げていく

相談支援や居宅介護をする中で、退院前から保護者と繋がることで地域に出てきた時にすぐに自宅でのサポートができるようにしていく。また、外出支援や放課後等デイサービスなど医療的ケア児も利用できるサービスを展開していく。



「雨」をテーマに色々な楽器で様々な音を奏でた



保護者が抱える悩みや困りごとを聞くことができた



看護師の方が多く参加した研修会となった

入院中の学習支援及び復学支援のための対面ないし遠隔地に 対応可能な支援者育成事業

事業の目的

1. 学習支援者を養成することにより、愛媛県内の病気の子どもの学習ニーズに応えることができるようになる。また各地域に支援者が増えることにより子どもたちの要望を満たすことが可能になり、学習する意欲の向上、支援者の病気に対する理解が深まる。
2. 対面での学習支援実習に加え、ICT機器を活用することにより、子どもたちが自分のいる場所で学習することを可能にする。

事業内容と活動経過

連携関係を築いてきた愛媛大学教育学部と協働し、これまでに開発した学習支援者養成プログラムを再構築し、学習支援活動希望学生(医学部・教育学部、医療系専門学校)10名、社会人(医療・教育関係者、病気の子どもの保護者)3名の計13名を対象に、学習支援研修会を6回(90分×12コマ)行った。2019年度はオンデマンド学習システムとして、対面の研修会を録画、編集したのち受講生のみ限定公開にて配信を行った。毎回の研修会後にはレポートの提出を課し、修了とみなした。また、第2回研修会後、実習として実際に病院に訪問し学習支援を実施した。

1.研修会スケジュール *敬称略

- 第1回(90分×2) 監修/講師:愛媛大学大学院教育学研究科 榎木暢子
病気療養児の学習支援について/医学的知識の基礎(医療法人 ゆうの森たんぼクリニック 大藤佳子) /学習支援実習に向けた個別面談
- 第2回(90分×2)
病児を取り巻く支援(認定NPO法人ラ・ファミリエ 西朋子) / 学習支援実際の流れ/ICT機器を使用した学習支援(認定NPO法人ラ・ファミリエ 越智彩帆)
- 第3回(90分×2) 監修/講師:榎木暢子
病気の子どもの発達課題/余暇支援/学習支援経験者との情報交換会
- 第4回(90分×2) 監修:榎木暢子
シブリングサポーター研修ワークショップ(NPO法人しぶたね)
- 第5回(90分×2)
病気の子どもになぜ教育が必要なのか(昭和大学大学院保健医

療学研究科 副島賢和)

第6回(90分×2) 監修:榎木暢子
・学習支援ボランティア実習成果報告会

2.学習支援ボランティア実習

9月以降、受講生のうち6名が、入院または自宅療養中の病児に、本人の体調に合わせて週1回1時間程度の学習支援を行った。毎回の活動後は活動報告書の提出を課した。対象児は、小6女兒(計14回)、中1男児(計5回)、中2女兒(計27回)、中3女兒(計7回)、高1男児(計8回)の計5名である。受講生が実習に入る前に当法人スタッフが面談、数回学習支援を実施し、個別の学習支援目標に合わせて学習を進められるようにした。

事業の成果

病気に対する理解や病児の心理に加え、病児の家族のこと、対面に限らず遠隔地での支援について知識や技術のある学習支援者を育成することができた。オンデマンド学習システムにより、弾力的な学習が可能となり、愛媛県内の学生に加え、社会人の参加もあり、人材の幅を広げることができた。ICT機器を使用した遠隔支援のための人材の育成と病院の環境整備が進み、子どもが自分のいる場所での学習ができるようになってきている。

課題および展望

遠隔地のニーズはもちろん、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う休校や対面学習支援の自粛により、さらに遠隔学習支援の必要性が高まっているといえる。人的資源・物的資源の確保、環境整備を行い、より幅広く遠隔学習支援を実施していくことが求められる。今年度開発したオンデマンド学習システムを活用し、来年度以降も人材育成を図ることが必要である。また、研修修了者の更なる知識や技術の向上と学習支援者への継続的なフォローアップのため、活動開始後の情報交換の場を定期的に設ける必要がある。



学習支援ボランティア研修会のうち第1回の様子



病院内での対面での学習支援ボランティアの様子



学習支援ボランティア研修会を動画にまとめたオンデマンド配信の一部

団体概要

※2020年7月現在

名 称：公益財団法人 ベネッセこども基金

所 在 地：〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

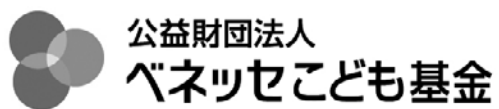
設立年月日：平成26年（2014年）10月31日

※公益財団法人移行日：平成27年（2015年）4月1日

役員および評議員

代表理事・理事長	五十嵐 隆	国立成育医療研究センター 理事長
代表理事・副理事長	福原 賢一	株式会社ベネッセホールディングス 特別顧問
理事	耳塚 寛明	青山学院大学 コミュニティ人間科学部 学部特任教授
理事	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院 副院長 看護部長
理事	青柳 光昌	一般財団法人社会的投資推進財団 代表理事
理事	マセソン 美季	公益財団法人日本財団 パラリンピックサポートセンター 推進戦略部プロジェクトマネージャー
理事	岡田 晴奈	株式会社ベネッセホールディングス 取締役 兼 上席執行役員 グローバルこどもちゃれんじカンパニー カンパニー長
監事	尾尻 哲洋	税理士
評議員	高野 一彦	関西大学社会安全学部・大学院社会安全研究科 教授
評議員	宮城 治男	特定非営利活動法人エティック 代表理事
評議員	西村 洋	株式会社ベネッセホールディングス 執行役員 社長室長

発 行：公益財団法人 ベネッセこども基金
デ ザ イ ン：株式会社 協同プレス
印刷・製本：株式会社 協同プレス



<https://benesse-kodomokikin.or.jp/>

